



氏名	田中美穂		
ローマ字 姓(大)名(小)	TANAKA Miho		
所属学科	一般科文系	職名	准教授
最終学歴	東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻博士課程修了		
学位	博士（史学）		
所属学会	史学会 日本アイルランド協会 メトロポリタン史学会 西洋中世学会 等		
研究分野	中世アイルランド史 ブリテン諸島史		
研究テーマ	○アイルランドを中心とした中世ブリテン諸島史（とくに各王国や王権に関する研究） ○中世アイルランドのキリスト教史（修道院や聖人に関する研究） ○「ケルト」問題に関する研究		
主な研究業績（著書，論文等）			
[1] [共著] 「第 15 章 キリスト教の伝来——「聖人と学者の島」アイルランド」、『ケルトを知るための 65 章』（木村政俊編著），明石書店，2018 年，93～97 頁。			
[2] 「中世アイルランドの修道院と文化～アイオナ修道院を中心に～」、『cara』第 25 号，2018 年，19～24 頁。			
[3] 『『ケルズの書』は「ケルト」美術の傑作か？——「ケルト」再考論の入門として——』、『大分工業高等専門学校紀要』第 54 号，2017 年，1～6 頁。			
[4][共著・事典執筆]『ケルト文化事典』（木村政俊・松村賢一編著），東京堂出版，2017 年。			
[5] 「「アイルランド領主」としてのイングランド王ジョン」、『大分工業高等専門学校紀要』第 53 号，2016 年，1～6 頁。			
[6] 「ウィリアム・マーシャルとアイルランド：13 世紀初めのイングランド人領主の足跡」、『エール（アイルランド研究）』第 35 号，2016 年，58～64 頁。			
[7] 「中世アイルランド史研究の今」、『歴史と地理 691 号：世界史の研究 246 号』（山川出版社），2016 年，57～60 頁。			
[8] 「アイルランド人の起源をめぐる諸研究と「ケルト」問題」、『大分工業高等専門学校紀要』第 51 号，2014 年，1～6 頁。			
[9] 「中世後期アイルランドの世俗権力者たちと修道院」、『エール（アイルランド研究）』第 33 号，2014 年，181～194 頁。			
[10] 「ルアリー・ウア・コンホヴァルと二人の侵入者たち—中世後期アイルランドの政治的変			



- 容に関する一考察—, 『メトロポリタン史学』第9号, 2013年, 113~131頁.
- [11] [翻訳]「第4章 教会とキリスト教的な生活」, バーバラ・ハーヴェー編/鶴島博和監修・吉武憲司監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 4 12・13世紀 1066-1280年頃』, 慶應義塾大学出版会, 2012年, 169~210頁.
- [12]「アイルランドの聖人伝研究: コギトス『聖ブリジット伝』を中心に」, 『ケルティック・フォーラム』第15号, 2012年, 52~53頁.
- [13] 'Ruaidrí Ua Conchobair: the last high king of Ireland', *The Haskins Society Journal Japan*, vol. 4, June 2011, pp. 39-44.
- [14] [共訳]「第5章 ラテン語と現地語: 二言語テキスト文化の創造」, トマス・チャールズ・エドワーズ編/鶴島博和監修・常見信代監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 2 ポスト・ローマ』, 慶應義塾大学出版会, 2010年, 243~278頁.
- [15] [共著]「第5章 イギリスの宗教と生活」, 下楠昌哉(責任編集)『イギリス文化入門』, 三修社, 2010年, 130~153頁.
- [16] “‘Nation’ Consciousness in Medieval Ireland”, *Journal of International Economic Studies*, The Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University, No. 24, 2010, pp. 3-16.
- [17]「アイルランドとヴァイキング」, 東北学院大学オープン・リサーチ・センター『ヨーロッパ・グローバル化と諸文化圏の変容 研究プロジェクト報告書Ⅲ』, 2010年, 100~110頁.
- [18] [共著]「第1章 中世アイルランドの「ネーション」意識」, 法政大学比較経済研究所/後藤浩子編『アイルランドの経験——植民・ナショナリズム・国際統合』, 法政大学出版局, 2009年, 3~27頁.
- [19] [翻訳] マリー・テレーズ・フラナガン著, 「聖人と学者, それとも遅れた野蛮人? ——変化するアイルランドの概念——」, 『関西大学西洋史論叢』第11号, 2008年, 70~83頁.
- [20]「中世アイルランド史研究の諸相: ブリティッシュ・ヒストリーとアイルランド」, 『中世ブリティッシュ・ヒストリーの可能性と射程』(平成16年度~平成19年度科学研究費補助金基盤研究(B), 研究代表者: 熊本大学教育学部教授・鶴島博和、研究成果報告書), 2008年, 111~126頁.
- [21] [共著・事典執筆]『スコットランド文化事典』(木村正俊・中尾正史編著), 原書房, 2006年.
- [22]「12世紀後半アイルランドへのノルマン到来——ディアルミド・マク・ムルハダによるストロングボウ招聘——」, 『エール(アイルランド研究)』第25号, 2005年, 135~150頁.
- [23] 共著(古アイルランド語史料研究会)「『アダムナーン法』」, 『ノートルダム清心女子大キリスト教文化研究所年報』第27号, 2005年, 92~116頁.
- [24]「島のケルト」再考——ブリテン諸島史の可能性を探って——, 『ケルティック・フォーラム』第7号, 2004年, 54~57頁.
- [25] “Iona and the kingship of Dál Riata in Adomnán's *Vita Columbae*”, *Peritia: Journal of the Medieval Academy of Ireland*, Brepols, volume 17-18, 2003-2004, pp. 199-214.



- [26] 「「島のケルト」再考」, 『史学雑誌』第 111 編第 10 号, 2002 年, 56～78 頁.
- [27] 「中世初期アイオナ修道院とダール・リアダ王権——『聖コロンバ伝』における王の聖別の叙述をめぐる一考察——」, 『史学雑誌』第 110 編第 7 号, 2001 年, 48～71 頁.
- [28] 「アダムナーンの『聖コロンバ伝』における聖人像——聖人伝の執筆意図をめぐる——」, 『エール (アイルランド研究)』第 20 号, 2000 年, 73～87 頁.
- [29] 「7 世紀アイルランドの聖人伝研究——主張・プロパガンダの記述の解釈をめぐる——」, 『西洋史学』第 199 号, 2000 年, 61～74 頁.
- [30] 「7 世紀コロンバ崇敬の展開——俗語の詩における聖人像——」, 『エール (アイルランド研究)』第 19 号, 1999 年, 144～149 頁.

学術関係の受賞歴

社会活動

1997 年から 1998 年まで国際ロータリー財団奨学生としてアイルランド国立大学ユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンに留学.

日本西洋史学会第 60 回大会 (2010 年度) 準備委員.

技術相談・協力できるテーマ

アイルランドとブリテンの歴史と文化全般 ヨーロッパ中世史全般